

県内障害福祉団体へのヒアリング結果

(仮称)滋賀県障害者文化芸術活動推進計画(原案)をもとに、県内福祉団体へのヒアリングを実施。

【ヒアリング実施団体】

- ・ 社会福祉法人 滋賀県中途失聴難聴者協会(聴覚障害)
- ・ 社会福祉法人 滋賀県視覚障害者福祉協会(視覚障害)
- ・ 公益財団法人 滋賀県身体障害者福祉協会(肢体不自由)
- ・ 特定非営利法人 滋賀県精神障害者家族会連合会(精神障害)

意見・情報の要旨

「親しむ」について

- 公演や展覧会等のイベント開催にかかる情報提供については、ヒアリンググループ、要約筆記、タブレットの貸出等、どのようなサポートが提供されるのかが分かるとよい。
- 文化施設の多くで手話対応をしているが、手話を使用しない聴覚障害者も多い。
- 鑑賞や参加するまでの過程にも障壁が多くある。ロビーや受付の対応、館内の移動、館内放送での案内等が理解できないため、文化施設へ足を運びにくい。
- 民間や文化施設等で行われるダンス教室などに参加したいが、講師の指示が理解できないなど、障害者が参加するにはハードルが高い。こうした身近にある文化教室に参加する際のサポートがあれば、文化に対する興味が高まるのではないか。
- 美術館や博物館といった文化施設では、帯同ヘルパーから作品の解説を聞く行為自体が他の鑑賞者に対する迷惑行為として注意を受けることがある。白杖持参者に対する配慮などを期待したい。
- 自らが購入した座席で鑑賞できるようなサポートがあるとよい。
- 車椅子で来場した場合でも、車いす席専用ではなく希望する席で鑑賞できるようなサポートがあるとよい。
- 一般の鑑賞者と混ざって鑑賞できるかという不安があり、文化施設等へ足を運びにくい。
- 特定の公演や展覧会に興味・関心があっても、ヘルパーに興味がない場合は会場内まで誘導してもらえない場合がある。文化施設内を案内(誘導)するスタッフが配置されていると足を運びやすくなる。
- 近年、作品や展示物のレプリカに触れる展覧会が開催されている。音声ガイドとともに立体的に展示物を体感できることは、文化に対する関心を高め、再訪したい気持ちになる。
- 一般に文化施設で行われる公演や展覧会は敷居が高い。
- プロの演奏家と一緒に打楽器のワークショップ等を行うと、普段は見えてこない障害当事者の一面を見ることができるとよい。
- 幼少期から多彩な文化芸術を体験することは、その後人生において文化芸術に親しみを感じ、意欲を高める上で大変有意義なことである。
- 「ホールの子」事業に養護学校の生徒も参加しているが、他校の生徒と文化芸術を介して交流できる仕掛けがあればよいと思う。
- 古い文化施設では、エレベーターの未設置、バリアフリー対応や案内表示がない場合が多く利用しにくい。
- 会場までのアクセスなど、施設周辺の環境整備を期待したい。

「つなぐ・支える」について

- 近年、障害者の特性を理解した取組を行っている公演がみられるようになってきた。
- 周りの人の協力体制がどこまで構築できるのかが、活動を推進するためには最も重要である。
- 文化活動をしたくても、どこに行けばいいのか、障害に対するサポートや配慮があるのかといった情報を得る機会が少ない。
- 文化施設内において、筆談支援者などサポート職員であることが一目で分かるような取組があるとよい。
- 近隣の公民館や文化施設などを会場とした文化祭や作品展などの開催が減少している。こうした地域における発表の機会が増えることが、文化芸術に対して関心を持つきっかけになるのではないか。
- 身体障害者の多くは在宅の方であるため、こうした在宅の方が気軽に体験できるような施設やサポートがあれば良いのではないか。
- 社会福祉団体の仲介により芸術大学の教員と関わることができ、作品制作ワークショップを開催したり、子どもが造るものを作品としてとらえる価値観が芽生えた。こうした芸術家や芸術大学の教員・学生と交流できる機会が増えることを希望する。
- 職員の人数や著作権等の知識が不足している中で、契約などの様々な事務手続きを負担してまで文化芸術活動に取り組むことは厳しい面もある。ワンストップで事務手続等の代行サポートを行う機関があれば、文化芸術活動を奨励することができる。

その他

- 計画ができることにより、障害者への理解が文化施設や団体に広がることを期待したい。
- 就労支援事業は、本来の目的に沿って活動を計画しており、余暇活動として文化芸術活動に取り組むのはハードルが高い。